

ブレンディッドスクーリングにおける相互評価を効果的なものにするための試みと結果

田畑 忍*1・守屋誠司*1・魚崎祐子*1・豊田修*2
Email: tabata@edu.tamagawa.ac.jp

*1: 玉川大学教育学部教育学科通信教育課程
*2: 玉川大学教育学部

◎Key Words ブレンディッドスクーリング、通信教育、グループ学修、相互評価

1. はじめに

玉川大学通信教育課程では現在、メディア授業と対面授業を組み合わせたブレンディッドスクーリングを5科目開講している。メディア授業では、授業動画の視聴だけではなく、レポートの作成や課題テスト、相互評価などを科目に応じて課している。相互評価については、学修内容の理解や振り返りなどに有効であることが報告されている⁽¹⁾。以前、筆者の一人が、メディア授業で作成した振り返りシートをもとにした相互評価を本学の教育サポートシステム⁽²⁾上で実施した際にも、「メンバーのコメントは自分の学びになった」「グループ学修はとても良かった」などの肯定的な意見が多く聞かれた。しかしながら、「どのような人かわからない中でのコメントは気がひけた」などの意見も聞かれた⁽³⁾。本研究では、遠隔での相互評価を実施する前にアイスブレイクを取り入れることにより、相互評価時の不安を軽減し、相互評価をより効果的なものにすることを目指した。なお、上記の試みを実施するブレンディッドスクーリングは本稿を執筆している現在、実施中であるため、本稿では試みの内容と実施したアイスブレイクの様子などについて記述する。学生へのアンケート調査の結果などについては発表時に報告する。

2. 対象のブレンディッドスクーリングについて

対象のブレンディッドスクーリングは15回の授業うち、メディア授業7回、対面授業8回で実施している。メディア授業では、授業動画の視聴やテキスト学修などを行う。学修期間は約1か月間である。メディア授業で学修する内容は、「インストラクショナルデザイン」「グループ学習の基礎」「学習と個人差」「授業におけるICT利用」など、対象科目に関する基礎的な内容である。対面授業は、土日の2日で実施する。メディア授業で学修した内容をもとに、グループで課題を作成したり発展的な学修内容を確認したりする。

対象のブレンディッドスクーリングでは、各回の授業動画の内容やテキストの学修の内容を200文字程度で振り返りシートにまとめる課題がある(図1)。また、メディア授業と対面授業の間には、振り返りシートをもとにコメントし合う相互評価を行う。相互評価の期間は1週間である。4人1組のグループで行う。相互評価では、メンバーの振り返りシートを確認して気付いたことや疑問点などをコメントし合う。学修内容の理解を深めること、見落とししていた点を確認することなどが相互評価を行う

目的である。これまでの試行では、メンバーが記入したコメントに対して、コメントを返して議論をする場面も数多く見られた。

教育の方法と技術 振り返りシート 学籍番号 [] 氏名 []

[1回目]学修した内容のまとめ・望ましい教育活動を果たすには、教育の目的と内容と方法の三者が相互に結びつき、一貫性を持たなければならない。教師がそれぞれ教育に対する想いを明確にする事が重要。・授業の方法や技術は個別できるが、どれか特定の手法や技術は唯一絶対ではなく、相互に関連し合う事で授業は形作られる。授業を一つのシステムとして捉えると、教師の機能は極めて重要な役割を担い、システムの設計者、評価者としての能力、更に評価に基づいてそれを修正し改善する能力が必要。	[2回目]まとめと疑問点・教育工学は成功的教育観に基づき、教授学習の効率化を図ろうとするもので、その影響で「授業設計」が指導計画という言葉に代わって用いられるようになった。授業設計に於いて、検証可能な明確な形で妥当性のある目標を設定するのが不可欠だ。疑問：演習科等ではどの様に明確で客観的に学習者の到達を図れる目標を設定するの？・インストラクショナルデザインでは、POGAサイクル(システムのアプローチ)やADDEモデルを用い、その構成に於いて9教授事象は立派な視点。
[3回目]まとめと疑問点・指導形態は個別指導、一斉指導、小集団指導の3つあり、それぞれ利点と問題点がある。一つの形態を優先し他を軽視せず、それぞれの形態が最も有効に働くよう、選択或は組み合わせる事が重要。疑問：ホームスクーリングの場合は学習に継続が生じるか？・アクティブラーニングで重要視されるグループ学習を取り入れる際は児童生徒に任せず、教師が適切な役割分担、介入、促し等を与え、確実に目標に達成させる事が重要であり、ファシリテーションのスキルが求められる。	[4回目]学修した内容のまとめ・明確で具体的な目標を設定し、授業の各段階に於いて常に継続的、累積的に評価を行う事は、授業の改善と教師の専門的力量向上の鍵であると言える。評価は絶対評価、絶対評価と個人内評価の3種あり、評価マトリックスや、統合評価法はこの重要な手がかりとなる。・今までは評価を生徒の出来具合を測る事としか考えていなかったが、実は教師自身の指導や授業設計に対する評価であり、所謂テストだけではなく、授業の経過全体に沿って進められるものである。
[5回目]学修した内容のまとめ・授業設計から見た学習指導案には授業の目標、その編成が対称的に記述し、アイスブレイク生徒の編成(教師個人差の一掃)も本則あり、その制を把握し	[6回目]学修のまとめ・個人差には個人差と個人内差の二通りの基準があり、量的個人差と質的個人差の二通りの基準があり、その制を把握し

図1 振り返りシートの例

3. ブレンディッドスクーリングにおける改善

筆者の一人が担当するブレンディッドスクーリングは、これまでに3回実施してきた。昨年度のPCカンファレンスで報告したが⁽⁴⁾、昨年度は本学教育サポートシステムの「お知らせ」機能を利用し、学受講生全体の学修の進捗報告をメディア授業期間中に3回報告するようにした。これにより、メディア授業時の学修ペースに関する不安の解消を目指した。また、「学修課題一覧の配布」や「質問回答に関する改善」など、学生が学修を円滑に進めることができる学習環境を設定するための改善を行っている。

4. 本研究の目的

相互評価については、学修内容の理解や振り返りなどを目的に多くの実践が行われている。また、以前から、遠隔での実践も多く行われており⁽⁵⁾、相互評価と学習継続意欲などについての検討もなされている⁽⁶⁾。先に述べたとおり、筆者の一人が実施しているブレンディッドスクーリングにおいては、メディア授業で作成した振り返りシートをもとに相互評価を行っている。授業後のアンケート調査では、「メンバーのコメントは自分の学びになった」などの肯定的な意見が多く聞かれたが、「どのような

人か分からない中でコメントは気がひけた」などの意見も聞かれた。

そこで本研究では、相互評価を行う前にアイスブレイクを複数回取り入れることにより、遠隔での相互評価に対する不安を軽減し、相互評価をより効果的なものにすることを目指す。

5. アイスブレイクを取り入れたブレンディッドスクーリングの概要

対象科目は、筆者の一人が担当するブレンディッドスクーリング「教育の方法と技術（幼・小）」である。ブレンディッドスクーリングのメディア授業は、2019年5月11日から6月14日に実施する。学生はこの間に、授業動画の視聴と振り返りシートの作成などの課題を行う。振り返りシートをもとにコメントし合う相互評価は、6月15日から21日に実施する。コメントは、メンバーの各投稿に対して400文字以上とした。対面授業は6月22日から23日に実施する。今回のブレンディッドスクーリングの受講者数は30名であったので、4人グループを6組、3人グループを2組とした。学生には、このグループが対面授業でのグループでもあることを伝えた。グループ分けについては従来、相互評価の直前に発表したが、今回はアイスブレイクを実施するため、メディア授業開始直後に発表した。なお、アイスブレイクと振り返りシートをもとにした相互評価の目的などについて説明した動画を新たに作成し、ブレンディッドスクーリングの申し込み前に確認させた。

アイスブレイク1回目では、自己紹介のための名札(図2)を作成し、各グループの投稿場所に投稿する。名札については、対面授業でも利用する。名札は教育サポートシステムに用意しているテンプレートを利用して作成する。名札の作成方法については、メディア授業1回目の授業動画で説明をしているので、メディア授業期間中の5月18日から19日の間に名札を投稿するように指示した。また、アイスブレイク2回目として、自身の学修の進捗報告をグループ内でさせる。6月8日から9日の間に報告するように指示した。それぞれのアイスブレイクでは、メンバーが投稿した名札や進捗報告を見て、相互にコメントし合っても良いとした。なお、予定では1回目と2回目間の間にあと1回、アイスブレイクを行う予定であった。しかし、1回目の時に名札を想定外の場所に投稿され、そ

れを教職員が把握できないことなどが起こったため、投稿を含むアイスブレイクの実施を急遽中止した。

6. アイスブレイクの状況

本稿を執筆している現在、2回のアイスブレイクは終わっている。アイスブレイク1回目の名札の投稿については、30名中28名が期間中に投稿した。1名については、投稿を促す個別メールを送ったが、回答はなかった。1名は、投稿場所以外の所に投稿していたことがわかり、後日、正式な場所に投稿し直した。アイスブレイク2回目の学修の進捗報告については、30名中26名が報告した。投稿を促す「お知らせ」を全体に向けて行った。2名が期間外に「忘れていた」ということで報告した。なお、アイスブレイク1回目は8組中5組で、アイスブレイク2回目は8組中6組で相互にコメントし合っていた。

7. おわりに

遠隔での相互評価をより効果的なものにするため、メディア授業期間中に2回のアイスブレイクを実施した。簡単なアイスブレイクであったが、参加しない学生がいた(うち、1名はメディア授業の学修が進まず、途中で辞退)。学生が、より取り組みやすい方法を再検討する必要がある。また、異なる投稿場所に投稿した学生がいた。学生の学修画面の表示や説明などでの工夫が必要である。一方で、ほとんどの学生は期間中に投稿、報告することができた。アイスブレイクが、遠隔での相互評価にどのような影響を与えたのか、現時点ではわからないが、アンケート調査などを実施することにより、その効果を確認したいと考えている。

なお、ブレンディッドスクーリング申し込み前に確認をするように指示した説明動画について、視聴が十分ではない学生がいた。相互評価はグループ学修となるため、各学生の参加が他の学生の学修に影響を与える可能性がある。今後は説明動画の視聴と相互評価などの理解が十分なものになるように、スクーリングレポートと連動させることなどを考えている。

参考文献

- (1) 名倉昌巳、松本伸示「形成的評価を加味したパフォーマンス課題を取り入れた理科授業開発 - 中学生の地学分野における進化概念形成を事例として -」、理科教育研究 Vol.58 No4、2018年、pp.335-365
- (2) 日本システム技術株式会社 (GAKUEN Edu Track) : <http://www.jast-gakuen.com/edu/?p=get> (参照日: 2019年6月13日)
- (3) 田畑忍、他「通信教育課程におけるブレンディッドスクーリングの試行結果—学習内容の理解と学修への積極的な取り組みを目指した試行の結果—」、コンピュータ&エデュケーション Voi.43、2017年、pp.30-35
- (4) 田畑忍、他「効果的なブレンディッドスクーリングを目指して—昨年度の試行結果を踏まえて—」
- (5) 植竹朋文、他「遠隔地におけるグループコミュニケーションの実施方法の検討とその評価」、専修大学情報科学研究所所報 (80)、2013年、pp11-17
- (6) 渡邊文枝、向後千春「JMOOCの講座におけるeラーニングと相互評価に関連する学習者特性が学習継続意欲と講座評価に及ぼす影響」、日本教育工学会論文誌41 No.1、2017年、pp.41-51



図2 名札の例